

「和紙と墨」(書道用)をつくるときの のりについて

戸田金作

読者のみなさんは、今までに一度や二度、美術の秋を飾る「日展」をご覧になったと思います。ここでもう一度「日展」第五科・書の会場に展示された各書家の作品を思い出してみてください。

書は中国・朝鮮・日本など、ごく限られたアジアの漢字文化圏のみに発達したもので、現在わが国では文字を素材とした一種の造型芸術としてあつかわれています。

芸術としての書は、各作家がもっている思想や感情などを作品に表現するのですから、線の墨色や・にじみ・かすれ・といった各々の作家がつくり出す固有の表現を受けとめることが出来る質の良い紙や墨が要求されます。

もともと紙と墨は、書のために生れたものであり、いわば夫婦のようなあいだがらで、紙は墨との、墨は紙との相性を考えてつくられています。

(一) 和紙とトロアオイ

和紙は、こうぞ・みつまた・がんばなどの木の皮から採集した糸状の長い繊維を、さらに臼でたたき、細く短くしてつくった繊維の液にトロアオイの根をつぶしてつくった粘液を加え、すだれ状の網で漉いた繊維層を乾燥させたものです。

繊維液に加えるトロアオイ(黄蜀葵)は双子葉植物・アオイ科の一年草で、根に多量の粘液質をふくんでいるため、薬剤の粘滑剤や錠剤の賦形剤としても使われています。

ここで注目したいことは、紙漉きの工程で繊維液に加えたトロアオイが、すだれのすきまから繊維が水といっしょに流れるのを防ぎ、一定の厚さの繊維層を網の上につくる働きを助けると、次の乾燥工程で姿を消してしまうことです。

私たちは、トロアオイがそのまま残って紙の組織である繊維と繊維を接着させる役割を果たすものと考えていたのですが、トロアオイの方は、その役割は自分よりも、こうぞ・みつまたなどの繊維自体がもっているセルロースの接着性にまかされた方が、墨液との親和性がよくなることを知っていたようです。

墨液が紙の組織に浸透するのは繊維と繊維の空間によって生じる毛細管現象の働きによるもので、墨液が紙の組織の深いところに届けば届くほど墨色がよくなることから考えて、異質の接着材を使って毛細管現象の条件を悪くするより繊維自体の接着性を利用した方がより効果的であることはいうまでもありません。先人たちが発見した素晴らしい生活の知恵といえましょう。

(二) 墨と膠 (ニカワ)

墨は、なたね油・ごま油などを燃やして採集した煤(すす)を膠の溶液で練り、木型で成型し乾燥させたものです。

煤を練るときに使う膠は動物の皮や軟骨などにふくまれているコラーゲンをゼラチンに変えて抽出したもので、水をすって膨潤し、熱湯によくとけて粘稠液となりますが、冷却す

ると固化しますので、木材・紙・布などの接着材として用いられています。

ここで注目したいことは、(1)煤から墨をつくる工程、(2)墨から墨液をつくる工程、(3)墨液から文字をつくる工程で膠が示す挙動と役割の変化です。

もともと膠は、水に対して親和性をもたないが、煤と繊維に対しては親和性をもっているため、(1)の工程では煤の粒子を一粒ずつ薄い膠の膜で包み水分を排除して墨の賦形を助けます。(2)の工程では墨と硯の摩擦によって生じる熱の力を借りて、煤の粒子を包んだままの姿で水の中に分散し優れた墨液をつくります。(3)の工程では硯の中の墨液が紙の上に到着するまで筆に停る働きを助け、墨液が紙の組織に浸透し乾燥すると、煤と繊維を完全に密着させます。書の墨色が永久に変わらないのは煤と膠を使っているからです。

みなさんは古い家の玄関で、文字以外のところが擦りへっているにもかかわらず、文字の部分だけが鮮明に浮き出している表札をご覧になったことがないでしょうか、これなどは煤と膠の合作がもたらした驚くべき一例です。

和紙と墨づくりは、“のり”の親和性をたくみに利用して効果をあげた実例であると思います。(教育映画監督)